

明治四十年四月一日創刊 令和六年四月一日 通巻第一、四〇六号 (毎月一回発行)

# 和歌新万葉

武島羽衣題簽

札幌興風会  
会長 間島誉史秀

## 北海道神宮献詠 四月兼題 「溶く(溶ける)」

村田俊秋先生選

歴史あるも民族ふたつの溶くるを祈ぐガザに在るいのちの絶たるるつづき

選者 村田俊秋

やうやうに春は来たりぬ我が庭に積もれる雪の日に日に溶けゆき

会長 間島誉史秀

春風に湖面の氷とけゆきて女神のごとく鷺降り立ちぬ

天位 大桃小やゑ

モスクワでソフトクリームが溶けぬ日もウクライナでは車が溶ける

地位 小野勇人

初孫のオムツ替ふるも泣き止まずミルクを溶かす手もぎこちなく

人位 門前和幸

興風会吾が人生に溶け込みぬ献詠をする三十三年

秀逸 室岡和子

溶け落ちし原発デブリの後始末「四十年で」真かそれは(福島第一原子力発電所事故)

秀逸 信田日裕

入浴剤溶けて出てくるおもちゃに子は雀躍りしつつかお風呂へ急ぐ

秀逸 遠田信之

弥生月雪の溶くるを待ちをりぬ靖國神社への参拝のありて

佳調 八尾師絹子

五十七歳に癌わづらふも克服し見事に溶けたる心と体

佳調 大潟廣子

幼子の居るらしき家の雪ダルマ半日で溶けたり地面を濡らし

佳調 梶谷久寿美

卒業式拍手で送る門出の春溶けゆく思ひで涙とともに

溶岩に呑まれほろびたるポンペイの遺跡を蜥蜴がササツと過るト

わが庭の隅にわづかにかたまれる雪の溶けゆく春迎ふると

大金と信頼と夢と溶けてゆく嘘かまことか違法賭博に

雪溶けて道路に水の溢るるも春が来るよと長ぐつ楽し

卵を割りチャツチャと溶く音軽快にジュツと広がり香りの立ちぬ

コーヒーに溶ける砂糖に気をひかれ理屈を問ふは考へ過ぎか

朝霜に身を潜めては耐へ忍ぶ雪溶け待てり庭のクロッカス

雪も溶け呼ばれるやうに山へ行きし長ぐつのドロの重さの懐かし

梅の木木は雪解け進むもまだ固く早る気持でつぼみに触れぬ

とろとろと溶けるバターとクリームのセパンケーキ食ぶ舌鼓打ち(珈琲亭ちるる)

いただけるこの和三盆口中で抹茶に溶けて至福の一時

小川 紫織

櫻谷 るみ

石川 弘子

後藤 優美子

窪田 明美

南 貴子

宮城 涼

楽間 直之

原 里子

中島 正倫

岩間 亜有加

加藤 紀恵子

## 総評

天位（大桃小やゑ）

湖の水が溶けて、初めて飛来した鷺なのかもしれない。春の風は氷を溶かし、女神を呼んだのではないか。鷺の湖面に立つ姿の白さは、気品のある尊い女神と見たのである。春を讀者に伝える、美しい詩的世界である。

地位（小野 勇人）

戦争を仕かけたロシア。国全体―経済も人の心も冷え込んでいるのだ。それゆえ、手にして食べようとするアイス・クリームは溶けないのだ。一方、そのロシアの非情なる攻撃で多くの車や人の生活が溶け崩れているのだという指摘の作。計り知れない冷酷なプーチンの心。冷寒なる状況にあるウクライナ人の心。こんなことを考えさせる一首。

人位（門前 和幸）

大変だなあと思いつつオムツを替える。ぎこちない手でミルクを溶かす姿が見えてくる。初孫ゆえの大変さと喜びを味わっているのだ。そこから生まれた作品。楽しく苦労してくださいと、拍手を送りたい。

秀逸（室岡 和子）

興風会に身を置いて短歌を作り、旭川の地にあつても猷詠祭に出、病を押して出詠を欠くことがなかった作者。「三十三年」に「溶け込みぬ」を具体的に示し、読者を引きつける。

秀逸（信田 日裕）

「真まことかそれは」が厳しい。原発事故から十三年。帰宅できない被災地、被爆した土等の堆積。土深く核のゴミを埋めても、その害の消えるには十万年。そういう中で、作者の大きな疑問。もつと多くの疑問を抱く作者、そして多くの人であろう。

秀逸（遠田 信之）

おもちゃをエサにして、お風呂に誘っているのであろう。雀躍りする様子と、うまく誘いだしている作者が見える。動的で明るい。二人の声も聞こえる。

佳調（八尾師絹子）

靖國神社参拝を考えていたのだ。雪が溶けてからの計画。それゆえに、雪の溶け、春のやってくるのが待ち遠しいのだ。深い思いからの作。

佳調（大瀧 廣子）

五十七歳の発病。それを克服。今は元気に日々を暮らす。「溶ける心と体」とは、病を克服し、元気という言葉で包み込んでいる心身を言っているのだ。健康を保っているからこそその一首。

佳調（梶谷久寿美）

東京の地にあつては珍しい雪ダルマ。それがあつたのだ。小さい子がいるのだなど、ほほ笑ましい思いになる。用があつて、半日ほど経ってから通ると、溶けてなくなっている。その辺りのぬれているのを見て、小さい子やその家族のガツカリしている様を思つての作。作者も同じような思いを抱いたのではないか。東京の小さい雪ダルマが、読む者の心から消えない。

## 札幌興風会 四月兼題(一) 「木」

## 村田俊秋先生選

舟を掘る鳥が来たかと目を凝らす残雪の上に散らばる木くず

天位 後藤 優美子

評 今、目にして残雪の上の木くず。キツツキを思う。それを見ている時には見えぬが、キツツキがしきりに木をつつく。お前は何をしているのかと問うが答えることなく、ただつつく。そうか春の海を漕ぎゆくための舟をつつき掘っているのか。木くずからの楽しい詩的世界を描いての作。

「デクノボー」とは「木偶でくの坊」かと驚きて賢治に学びぬ小五の我は(『雨ニモマケズ』より) 地位 信田 日裕  
評 「サウイフモノニワタシハナリタイ」で終わる『雨ニモマケズ』。賢治は三十七歳で夭折するが、凶作と不況にあえぐ農民に稲作指導をしている。そうしたことが『雨ニモマケズ』の背景にある。賢治を研究しているゆえの一首。

梅の木の寄贈の石碑に祖父の名を指に触れてみるなり(神宮境内 梅林碑) 人位 鎌田 憲子

評 神宮境内の梅林碑。これに作者の祖父の名。梅の木の寄贈者の一人であったのだ。うれしく思い、祖父に話しかけるように碑に触れたのである。そのことを詠む。

思ひ出の木木は今年も芽吹きたり実生のドングリ母の日の藤 秀逸 梶谷 久寿美

高校の正門横の樟は三十八年分高くなり 秀逸 小野 勇人

三本の桜伐られて三台の軽トラックの並びる春 秀逸 櫻谷 るみ

木笏を目通りに上げて神棚に祈る四歳「お父さんみたいでしょ」 佳調 遠田 信之

元気な日挨拶交はした杉の木に知らせに行かう脚の快復 佳調 窪田 明美

こつこつと叩く音して見上ぐれば樹上に遊ぶアカゲラが二羽 佳調 岩間 亜有加

藻岩山新緑に映ゆ桜花白いこぶしは春を伝ふる

桜木は大きく育ち実をつけてからすの子等の遊び場となりぬ

スズメ集ふイチイの木切ると隣家の人我はショックで切らぬを願ふ

木蓮の光る蕾に触れたれば心は溶けて春風に乗る

春風は通りすがりに木木の芽に季節の移りを知らせてゆきぬ

神宮の大きなかしは木枝広げ数多の命育む気高く

窓に見る冬枯れの木に煌めく陽二月の末に早春の色（異常に暖かな北の冬）

高い木の枝から落つる雪片よ見上げて避けて右へ左へ

札幌興風会 四月兼題(二) 「交差点」

村田俊秋先生選

見も知らぬ人がわが手をつなぎくれて渡り終へたり氷る交差点

天位 重川啓子

評 凍てついている交差点。ためらっていると手をつないでくれる人がいる。見知らぬ人だ。やさしい心遣いに感謝しつつ渡ることが出来たのだ。この親切な人への感謝の思いからの作。

交差点ボタン押す時身構へるこれで世界が変はりゆくやと

地位 窪田明美

評 このようなこともあるのだと一首を詠む。交差点の押しボタン。押すと青の信号。渡ることが出来る。押さないと信号は変わらない。押す、押さないで自分の行動が変わる。考えてみる。私の心の中の押しボタン。押し方で自分の生きる世界が変わるのではと。なるほどと、楽しく深く教えられる作品。

人間には衝突を避ける力あるとあらためて知る渋谷交差点

人位 小野勇人

評 渋谷交差点を渡りつつ考える。車との衝突を、向こうから来る人との衝突を避けることの出来る咄嗟の判断をする力があるのだと。そして改めて考える。罪のない老若男女を戦争という地獄に陥れる、それとの衝突を避ける力を、お前たちは持っていたはずなのにと。お前たちにこの一首を突きつけた。

渡り鳥と飛行機のとぶトナイ湖の空は美しき翼の交差点

秀逸 大桃 小やゑ

バスに乗り信号待ちの交差点の目に映る眺めに見入るは楽し（車の運転に飽きがきた）

秀逸 宮城 涼

歩行者の通過を待つて交差点を左折の我に会釈する人

秀逸 室岡 和子

交差点の大きな雪の山の消えこの朝の視野百八十度なり

佳調 大潟 廣子

尻餅をつきたる氷盤の交差点に感謝するなり迫る車の無く

佳調 信田 日裕

信号の点滅はじまる交差点を余裕で駆けたるわれ若かりき

佳調 櫻谷 るみ

交差点走つて渡ることもしせず急がず待ちゐる歳となりけり

鎌田 憲子

交差点きよきよ見回しリスが行く気をつけろよと思はず見守る

岩間 亜有加

四月から一人で渡る交差点入学祭の子ら健やかに

後藤 優美子

左右見て赤とまれ青すすめよとかたく教ふる吾子の手をにぎり

遠田 信之

交差点悲喜こもごもの想ひある一期一会の人に幸あれ

原 里子

交差点青信号の点滅に駆け渡る人を立ちて見やりぬ

梶谷 久寿美

交差点で右折同士が見つめ合ひ問合ひ測りてハンドルを切る

南 貴子

海外のニュースに大勢が六本木の交差点にゐて写真を撮りをり

八尾師 絹子

人生を変へる交差点行く先は天意のままなり有りがたきかな

加藤 紀恵子

札幌興風会 四月兼題(三) 「雑詠」

村田俊秋先生選

春の陽に白き根出づる瓶のなか去年手折りたる萩の枝より

天位 大桃 小やゑ

次次とこれ描いてよとねだる吾子妖怪凶鑑の頁をめくり

地位 遠田 信之

妹が好みて行きたる喫茶店遺影を抱きてコーヒーを飲む

人位 梶谷 久寿美

自転車が杖にかわりたる友に逢ふおどろきをかくせぬ迂闊なるわれ

秀逸 重川 啓子

被災せる能登半島の子供らの卒業の春いかにあるらむ

秀逸 石川 弘子

三月の陽射しを愛でむと出でてみるが残れる雪を来る風の冷めたく

秀逸 窪田 明美

湘南は弥生三月春うらら去りたる北の地雪の降りおむ(新天地に着いて)

佳調 宮城 涼

苦小牧出でてフェリーは八戸へ友情深むる初の船旅

佳調 八尾師 絹子

お返しを買ひにと息子が出かけ行く義理か本命か敢えて聞かねど

佳調 南 貴子

残雪をじやりじやり踏みつつ陽光に目を細めゐる三月終はる日

岩間 亜有加

給料日必ずケーキを買ひ帰る甘いもの好きのやさしき父に

原 里子

秋田犬海外にまで人気あり主人を守る生きざま見事

大瀧 廣子

I Q が百三十有る我が家の婿どんな質問も速答納得

加藤 紀恵子

春の彼岸間近に降る雪隙間なく空に残さず終ひはいつに

鎌田 憲子

信号でとまると気付く社号標お宮は西へ二十八町

後藤 優美子

昨夜より吹雪きて一日除雪せり弥生始めに春はまだ遠く

室岡 和子

「いこが好き？」若葉を広げるモンステラ掃除したての日の差すりビング

小野 勇人

会のたより

●三月二十日(水・祝)十時、本殿にて句祭並興風会献詠祭が斎行されました。その後、慶陽館二階あすなるの間に十一時から歌会を行いました。

【出席者】村田先生、石川、大潟、大桃、小川、重川、鎌田、窪田、櫻谷、八尾師、室岡各会員、事務局の中島、遠田各権禰宜の以上十三名。

●御誕生祝の短冊を贈呈

三月誕生者の石川弘子様、鎌田憲子様、八尾師絹子様には村田先生より御誕生祝の短冊が贈呈されました。茲にお祝い申し上げます、更なるご健勝を御祈念申し上げます。

●八尾師会員より御菓子をご頂戴し、三月二十日の歌会にて会員一同で頂きました。ありがとうございます。

●明治神宮献詠

明治神宮献詠一月兼題「開」にて当会の大桃小やゑ会員が佳作に入選致しましたので、作品をご紹介します。

『万葉集』家持の歌ひらきたり

能登半島震ふ年明けの日に

(事務局・遠田)

「札幌興風会」入会のご案内

札幌興風会は、明治四十年(一九〇七)四月、当時の札幌神社(現北海道神宮)宮司の額賀大直の頃に始められた歌会で、札幌の短歌結社の草分け的存在であります。月例の歌会は北海道神宮頓宮や札幌市内の各所で催されていますが、昭和五十年(一九七五)一月

から北海道神宮社務所で催すこととなり、毎月二十日の句祭にあわせて献詠祭を斎行し、引き続き月例の歌会を行っています。毎月会報『和歌新萬葉』を発行しています。

歴代の点者(ご指導頂いている先生)は、宮中御歌所参候、小杉榎郎を初代として、御歌所寄人の阪正臣、千葉胤明、遠山英一、鳥野幸次、武島羽衣また岡野弘彦といった方々が務め現在は十四代目の点者、村田俊秋先生にご指導賜っており、平成十九年四月に創立百年を迎えました。

毎月二十日の句祭並びに献詠祭では秀歌三首を天・地・人位として大前に和歌を奉納し、記念に特製の短冊を贈呈しています。歌会また勉強会では、初心者にも分かりやすいように作品鑑賞、添削、指導を行っております。

現在の会員は四十名で、二十代から九十代の方までおります。どなたでも入会ができて見学も自由です。『古事記』『万葉集』の頃より続き日本人に愛されてきた伝統文化、短歌に興味のある方、作ってみたい方の入会を心よりお待ちしております。

- 一、場所 札幌市中央区宮ヶ丘四七四 北海道神宮社務所
- 一、開催 毎月二十日

- 午前十時より句祭並献詠祭(本殿)
- 午前十一時より歌会
- (慶陽館・あすなるの間)
- 正午より短歌勉強会

- 一、月会費 三千元(うち玉串料千円)
- ※初回の会費不要。出席されず詠草提出のみの方、遠方にお住まいの方、学生の方は応相談。
- 一、その他

①毎月二十日、本殿にて句祭並興風会献詠

祭が斎行され、天地人位の秀歌三首に選ばれた方に特製の短冊を差し上げています。また、その月に誕生日を迎える方にも別にお祝いの記念品を贈呈しています。

②毎月会報「和歌新萬葉」を発行し、会員の皆様からお寄せ頂きました短歌を掲載致します。定期的に歌集『興風』を発刊致します。

③遠方にお住まいの方も歓迎致します。出詠頂きました短歌を添削し会報と共に郵送致します。

④会員相互の親睦を図るため、新年会、観桜会、観楓会、忘年会等を開催しています。

お申し込み・お問い合わせ

札幌興風会事務局 TEL.011-621-0262 担当 北海道神宮教化部 遠田(とくだ)

令和六年五月兼題

- 一、北海道神宮献詠 「下る(下がる)」
- 二、札幌興風会兼題 (一)「牛」 (二)「トラック」 (三)「雑詠」
- ※締切り 四月二十五日(土) 必着
- 三、明治神宮献詠 「箸」
- ※未発表歌厳守。締切は毎月十日ですのでご注意ください。
- 所定の様式にて各自の発送となります。

〒064-8505  
札幌市中央区宮ヶ丘四七四番地北海道神宮社務所内  
札幌興風会事務局  
電話 011-621-0262  
発行人 間島 誉史秀  
編集人 遠田 信之  
印刷人 白馬堂印刷(株)